

事業報告

子ども発達支援室 2012 年度事業報告

1. はじめに

子ども発達支援室の主たる業務は、関係諸機関との連携にもとづく地域支援である。具体的にはメンタルフレンド派遣事業、特別支援ボランティア派遣事業および知多地域における障害児等療育支援事業への協力の3つである。特に2つの派遣事業では、多くの学生がボランティアとして、適応指導教室や小学校での支援に直接かかわっている。そのため、ボランティア学生へのきめ細かなサポートや関係諸機関との密な連絡が必要とされ充実に努めているが、限られたスタッフでの対応の難しさもある。以下に、2012年度の各事業の内容及び課題について報告する。

2. メンタルフレンドの派遣

1996年度から制度化された、不登校等児童に対する本学のメンタルフレンド派遣事業は、2012年度で17年目を迎えた。子ども発達支援室における派遣は、2009年度をもって家庭への個別派遣を終了し、2010年度より地域の適応指導教室等における集団活動への派遣と一本化された。

2012年度の主な派遣先は、引き続き依頼のあった、武豊町適応指導教室、半田市適応指導教室、美浜町適応指導教室、本学付属高校の4か所であった。

a. 事業内容

学生への募集は、4月に学内の掲示板や講義などを通して呼びかけ、5月にはメンタルフレンド活動への理解を深めてもらえるよう「登録前の事前研修会」を2回行った（登録希望者はどちらか1回に参加）。事前研修会では、2008年度から各適応指導教室の先生にお越し頂き、教室の雰囲気、活動に求めることなどをお話してもらっている。このような募集を通して、今年度は合計35名（男子学生6名、女子学生29名）の学生が登録した。

登録をした学生には、研究員がまず個人面接を行った。個人面接では、学生それぞれの個性を知るとともに、活動可能な時間、希望する活動形態などを確認した。更に、YG性格検査を実施し、より学生の個性を理解するよう努めた。これらの情報と、派遣先の特徴や要望とのマッチングを行い、派遣先を決定した。

2012年度の派遣状況を表1に示す。派遣した学生は合計22名（武豊町適応指導教室には3名、半田市適応指導教室には8名、美浜町適応指導教室には6名、付属高校へは5名）であった。

それぞれの活動回数については表2に示すとおりである。

活動は基本的に毎週もしくは隔週のペースで、同じ曜日・時間帯に行った。活動を開始した学生には、活動日ごとの報告書の作成、更に定期的な（活動頻度にもよるが月に一回程度）個別のスーパービジョン（以下SV）を受けることを義務付けた。SVでは、報告書をもとに活動を振り返り、学生が感じる疑問や不安、気づきについて話し合い、指導を行った。更に、2月に「活動報告会」を開催し、活動する学生同士の体験からの学び合いを目指すとともに、活動をしていない登録者にも学習の場となるよう参加を募った。

また、派遣先との連携を図るため、4月には各適応指導教室の先生方に本学にお越しいただき、今年度の派遣

表1 2012年度メンタルフレンド派遣状況

派遣先	派遣人数
武豊町適応指導教室（武豊町字砂川）	3（女2）
半田市適応指導教室（半田市桐ヶ丘）	8（男1女7）
美浜町適応指導教室（美浜町大字北方）	6（男1女5）
付属高校 学習室	5（男1女4）
派遣学生合計	22

*登録者数35名

表2 2012年度メンタルフレンド活動回数

派遣先	活動回数 (のべ)												合計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
武豊							8	8	7	7	8	3	41
半田	1	14	12	19	0	17	17	13	10	13	14	0	130
美浜			7	9	0	8	19	12	11	9	0	1	76
付属						2	9	12	9	8	9	1	50
合計	1	14	19	28	0	27	53	45	37	37	31	5	297

人数や活動内容等の要望をお伺いするとともに、意見交換を行う機会を設けた。派遣を開始してからは、研究員が各適応指導教室へ1~2回訪問し、教室内の子どもたちの状況や、学生の活動の様子を先生方からお聞きした。また、普段は電話連絡等を通じた情報交換することで活動を支える関係作りに努めた。

b. 振り返りと今後の課題

2012年度も、派遣先の先生方には、学生のパーソナリティや進路、進学のことまで大変温かく見守って頂き、全体としては概ね肯定的に捉えて頂くことができた。学生も、経験豊かな先生方の子どもたちへのかかわり方、考え方を学ぶことができ、特に卒業を控えた四年生は、心理や福祉の専門家として、活動の体験を活かしていこうとする前向きな報告も多かった。今後も、派遣先への間接的な支援と、学生の成長の両方を視野に、サポートを続けていきたい。

これまでの課題として、学生の「活動の継続性」の問題があった。子ども発達支援室から派遣される学生は、1年間を通じ、決まった曜日や時間で定期的な活動を行っている。このような派遣の形態を取っているのは、派遣先の子どもたちを理解し、信頼関係を築いていくために、継続的で安定したかかわりが必要だと考えるからである。派遣された学生の多くは、大学卒業を迎えるまで数年間、活動を自ら選んで継続する。これは、学生自身も、活動を通して、何らかのやりがいや自己の成長を感じている証だと思われる。派遣先の子どもたち、また先生方との信頼関係の積み重ねは、支援をよりよいものにしていくだけではなく、学生にも自信を与えており、継続的なかかわりの大切さを感じる。

活動を中断する学生は、毎年数例あるが、これまで問題になってきたのは、活動を突然、無断で中断してしまったり、活動は続けていてもSVを休みがちになってしまっ

たりする学生がいたことであった。このような例には、学生生活の忙しさでモチベーションを維持できなくなる場合もあれば、活動を通して自分自身の価値観（対人関係の持ち方、不登校・学校に対する考え方など）と向き合った結果、活動やSVが辛い時間になってしまう場合もあり、理由はさまざまであった。曖昧な終了の仕方は、派遣先の子どもたちに不信感や不安感を与え、学生自身もどこかで後ろめたさを引きずってしまう可能性がある。

研究員は、今年度も引き続き、派遣先との連絡、また学生への声かけを頻繁にすることで、学生がさまざまな繋がりの中で活動していることを意識できるよう心がけた。また、報告書を作成しSVを受けることの意味（改めて振り返ることで感じ方や考え方が深まっていくこと、自分の感情を一人で抱え込まないようにすることなど）を、学生にその都度伝え、サポートできる関係づくりにも意識した。このような工夫もあってか、今年度、学生生活の忙しさや体調不良から活動を中止する学生は数名いたものの、それぞれ自分自身の状況を整理した上で辞めることを早めに判断でき、学生から派遣先に事情を説明することができた。そのため、問題となってきたような形で中断をする学生はいなかった。本学の学生は、ボランティアへの意識が高くがんばり過ぎてしまう傾向があるようである。特に、一年生は、学生生活を始めたばかりで様々な分野に興味を持つ意欲は大切だが、自分のできる範囲を見極めることも大事であり、今後も派遣前の面接やSVの中で、学生の状況を話し合いサポートしていきたい。

また、もうひとつの課題点として、卒業を控えた四年生の「活動の締めくくり」があった。子ども発達支援室では、活動を卒業する際にこれまでの報告書を振り返ってレポートを作成するよう、学生に促している。「終わり」を大事にすることは、得られたものや課題を整理し、次のステップへ繋げていくための作業になると考えるか

らである。しかし、毎年、年度末は、進路や進学で慌ただしくなりやすく、それができない学生もあり、早めの声かけをするようにしてきた。今年度もそのような対応をしてきたが、なかなか時間が取れず十分なまとめの作業ができなかった学生もいた。今後も、早めの時期に、SVの中でも活動の振り返りや整理を行い、学生のその後の活躍に少しでも繋がるよう工夫していきたい。

3. 特別支援教育ボランティアの派遣

本事業は、何らかの配慮やサポートが必要な児童のいるクラスへ、学生ボランティア、いわゆる特別支援「学生」支援員を派遣するものである。2008年度から半田市教育委員会との協議の上試行され、2009年度より正式に開始されたものであり、今年度で4年目を迎えた。2012年度の主な派遣先は、昨年度に引き続き依頼のあった、有脇小学校、亀崎小学校、雁宿小学校、宮池小学校の4校であった。このうち、宮池小学校へは、聴覚障害を持つ児童への支援が可能な、手話のできる学生の派遣を今年度から行なった。

a. 事業内容

学生への募集は、メンタルフレンドと同様、4月に校内の掲示板や講義を通して行い、5月には、活動への理解を深めてもらえるよう「登録前の事前研修会」を開催した。

このような募集により合計16名（男子学生2名、女子学生14名）の学生が登録を行った。学生の講義等スケジュールを検討した結果、派遣に繋がったのは12名であった。派遣状況の詳細は表3に示すとおりである。

表3 2012年度特別支援教育ボランティア派遣状況

派遣先	派遣人数
亀崎小学校	3 (男1女2)
雁宿小学校	3 (男1女2)
有脇小学校	2 (女)
宮池小学校	4 (女)
派遣学生合計	12

*登録者数16名

活動は基本的に、同じ曜日・時間帯に毎週行った。活動を開始した学生には、メンタルフレンドと同様、活動ごとの報告書の提出と、定期的なSV（活動頻度にもよ

るが月に1回程度)を義務付け、学生の活動状況の把握やサポートを行った。

また、2月には、支援の必要な子どもに対する理解を深めたり、学生の不安や疑問を話し合ったりする場として「活動報告会」を行った。活動者同士の学び合いを目指すとともに、まだ活動をしていない登録者にも、より具体的な学習の機会になるよう参加を呼びかけた。

派遣先との連携を図るため、4月には、半田市内の小中学校において、派遣先小学校の担当者、教育委員会担当者、子ども発達支援室の担当者の顔合わせを含めた打合せを実施した。この打ち合わせは昨年度からの試みである。派遣人数や活動内容など各小学校のご要望をお伺いし、研究員から本事業の目的の確認、ご配慮頂きたい点の確認を行った。

また、研究員が後期に1回、各小学校を訪問し、学生の活動の様子、対象となる児童の様子を伺い、問題点や改善点についてご相談させて頂いた。

b. 振り返りと今後の課題

学生の活動に対して、今年度も概ね肯定的な評価を頂いた。先生方には、学生の熱意や不器用さを大変温かく見守っていただきご指導頂いた。また、子ども発達支援室からの派遣学生であるという特色、学生が毎回の活動を研究員とのSVの中で丁寧に振り返り考えていることや、派遣を決定する際に学生の個性や小学校の特色を加味していることなども、好意的に捉えていただいた。

4月に行われた事前の打ち合わせ会は、昨年度からの取り組みであるが、半田市教育委員会にご尽力頂き、今年度も引き続き開催することができた。打ち合わせ会では、活動をより充実させていくための課題として、これまで明確になってきた、特に以下の3点について各小学校へ配慮をお願いした。

まず、学生の児童、クラスへの配置の仕方についてである。これまで一日の活動の中で、担当する児童やクラスが時限ごとに変ったり、毎週スケジュールが変わったりすることがあった。支援を要する様々な児童と接することは、学生にとって学ぶことも多い。しかし、週一日の限られたかわりの中で、信頼関係を築きながら児童への理解を深めていくには、ある程度決まった対象への継続的なかわりが望まれる。そのため、可能な範囲で、同じクラス、同じ児童を担当できるよう、先生方にご協力をお願いし、概ね対応して頂いた。学生も、児童

との継続的なかわりを通して活動の意欲が高まったようであった。

次に、担任の先生方と学生のコミュニケーションの問題がある。個々の児童の理解や支援の仕方、また、学生ボランティアとして期待される役割について、担任の先生と学生が方針を共有することは、児童へのより充実した支援に繋がる。しかし、先生方にも通常業務があり、学生の滞在時間も短い中、具体的な打合せを行うのは難しい現状にある。学生によっては、例えば、支援をしている児童が目の前でパニックになったとき、日頃の様子が分からないため、自分のかかわりで起きたのではないかと不安を感じる者もいた。このような問題を先生方にご相談した結果、朝の会で学生への具体的な指示を出していただくことや、対象児ごとにノートを作成し、支援にかかわった先生、学生の気がついたことを記入し確認し合えるようにしておくことなど、派遣小学校によって対応は違うが、様々な工夫して頂くことができた。学生側にも、先生方の児童への働きかけをよく観察し、学ぶ姿勢を意識させるとともに、児童について疑問があれば先生方に相談するよう促した。コミュニケーションの問題については今後も課題が残るため、引き続き方法を模索していきたい。

最後に、これまで担任の先生の不在時に、学生が一人で長時間クラスを任されるような場面があったことである。このような任務は、特別支援という本来の目的から外れており、学生も責任を負いきれない可能性がある。児童の安全も考え、必ず先生の監督の元で活動ができるよう、引き続きご配慮をお願いした。先生方のご理解を得て、今年度はこのような事態はなかった。

学校組織は年度ごとに変更があるため、特別支援コーディネーター担当の先生、学生が支援する児童やクラスが変わってしまうことも少なくない。4月の打合せ会で、共通認識を持たせたことは、その後の活動をスムーズに進めやすかったように感じるが、各学校内で周知されているかどうかは学校によって違いがあると感じた。今後、このような年度ごとの働きかけは続けていきたい。

この活動を希望する学生は、将来、特別支援学校の教員を目指すものが多く、活動への意気込みも強い。そのため、活動を実際に始めてみて、自分自身の限界や、児童を取り巻く環境への疑問を感じ、理想と現実の折り合いに悩むことがよくある。達成感は継続的な支援の先にあるものであり、試行錯誤すること自体が活動である。

今後も、学生の理想と現実の間の揺らぎをフォローしつつ、不安全感や不安感とも向き合えるようサポートを続けていきたい。また、学生が自分の限界を感じて、やむを得ず活動を辞退することになっても、誠意ある対応ができるような指導を心がけたい。

また、派遣に関する今年度の問題点として、派遣先から学生の活動曜日になるべく重ならないよう依頼されているが、今年度はやむを得ず同じ曜日で複数名派遣した小学校があったことである。先生方には学生のクラス配置など様々にご配慮頂くこととなってしまった。学生の講義スケジュールは重なりやすいため、今後は、募集の仕方にも工夫をしていきたい。

4. その他の活動

「知多地域障害者生活支援センターらいいふ」との連携において運営委員の教員を中心に障害児等療育支援事業への協力を行った。しかし、各教員が支援室とは異なる形で地域と連携し事業の中での役割をもつようになっているため、支援室独自の協力という形での連携はとり難くなってきている。そのため、次年度以降、本事業の契約のあり方について変更を検討している。

2012年度 子ども発達支援室構成員

子ども発達支援室長	堀 美和子 (子ども発達学部)
運営委員	渡辺顕一郎 (子ども発達学部)
	堀場 純矢 (社会福祉学部)
研究員	河合 裕子
	平野真紀子
	新美 都子